

対人援助本質は変わらず

道介護支援専門員協会

大島康雄会長に聞く

新型コロナウイルス感染拡大に伴いさまざまな活動が一部制約され先行き不透明だった2021年6月から、道介護支援専門員協会の舵(かじ)取り役を任された大島康雄会長に新年の展望を聞いた。科学的介護元年とも言われ、「離れていてもつながる」ICTの恩恵を感じた1年だったと振り返るとともに、ICT化が進んでも変わらない対人援助の本質「信頼関係構築」をケアマネ一人ひとりが積み重ねていく意識が大切と訴える。

―コロナ禍でさまざまな活動が制約される中、会長職に就いた1年を振り返って

13年間務めた前会長の村山文彦顧問からバトンを受け、責任の重さを実感している。前の会長のつくった基盤を

ともに、私の役割としてブロック活動支援に力を注いでいきたい。当協会は現在、全道13ブロックで活動を展開。就任からまだ半年

余りだが、既に全ブロックに足を運び、各ブロック理事から課題や要望、意見、アイデアをいただき現状把握に努

めている。

ケアマネの役割は、地域包括ケアシステム

一人ひとり信頼関係構築 積み重ねが価値向上に

段階から相談を受け付け、テーマや講師の選定をアドバイスしたり、協会事務局から講師を派遣したり、オンライン開催で不安のあるブロックを手助けしたり、会員の学びの場を確保できるようにしっかりと支援していく。コロナ禍で開催できなかった集合研修も再開され始めている。すっきり定着したZoom等を活用したオンライン開催は遠隔地でも気軽に参加でき、移動コスト面でも負担が少ないなど地方会員にとって利点は多い。会員は回を重ねるたびに操作にも慣れて熱心に聴講しており、今後もICT活用は継続、推進していく考えだ。

―ブロック活動支援とともに、力を入れていきたい取り組みは

ICT化を推進していきたい。オンライン研修が良い例だが、本道の広域性を考えると「離れていてもつながっている」と感じられるICT化推進の恩恵は大きい。こうしたメリットを実感している今だからこそ、介護・医療連携での活用など関係者の理解を得られやすいのでは。

例えば私たちケアマネの立場からすると、「電話掛けによるサポートが一つ。企画

おおしま・やすお さっぽろ社会福祉士事務所代表。ホームケアネットさっぽろ代表、まちラボSAPPRO事務局長、星槎道都大社会福祉学科准教授など幅広く活動。主任ケアマネ、社会福祉士、精神保健福祉士。

